

過酷の人生

神奈川県 宮 沢 信 行

昭和十六年春施行の徴兵検査が、東京市港区赤坂区役所にて行われた。私も徴兵検査に臨み、その結果第一乙種合格と担当の軍医官から言い渡される。後程甲種合格に編入せられ、翌年昭和十七年一月十日、東部第八部隊（旧麻布三連隊、後近衛第五連隊）に現役兵として入隊した。

所属は東部第八部隊第二大隊第四中隊小谷隊に編入させられ、真新しいウールの軍服他装具が支給された。私の所属は軽機関銃隊で、九六式軽機関銃である。東部第八部隊は近衛師団に所属であるため、宮城の禁闕衛兵として約一個大隊編制で、大隊長を中心に、軍装は禁闕用第一装用を着用、古い物は銃と帯剣のみである。宮城の禁闕衛兵であるため、なかなか軍装検査が厳しく、今もそれを思い出す。

部隊の中の第三大隊に賀陽宮殿下がおられ、通称、殿下中隊と呼ばれており、演習なども大変鷹揚で、我々の羨望の的であった。

当時の兵隊の服装は、演習用と外出用とに分かれ、演習用の服は外被のような服地で、通称三装用と言われ、外出時は二装用あるいは時には第一装用を着用、軍帽は近衛兵の軍帽で、赤に帯地が入り前立ちの入った星に桜の葉のついた軍帽で外出をし、町の人々が振り返るようであった。近衛連隊は外出時限に遅刻して帰営する者は皆無で、他の一般部隊では時折、遅刻帰営者があり、営倉の御厄介になっていた由である。昼間の演習、夜間の前哨勤務等、よく代々木の練兵場を使った。往復駆歩であるため初年兵に相当きついものであった。内地の教育期間三カ月が過ぎ、第一期の検閲が行われた。その検閲が終わって桜咲く春、我々は満州に渡るべく、その支度にかかった。

外地に赴くための家族との面会は宮庭で行われ、さすがに広い宮庭も家族父兄の人々でいっぱいとなった。ちょうどシンガポール攻略後の戦勝気分旺盛の折であ

り、国民の士氣旺盛この上もなかった。五十年以前のことであるから記憶も定かではないが、多分四月二十五日ごろであつたと思う。夜中、部隊宮庭に整列、賀陽宮殿下に敬礼、引続き部隊長に敬礼、いよいよ部隊と別れ出発である。沿道には夜中、父兄初め愛国婦人会の人々の見送り、麻布六本木より品川駅まで行軍、東京の町並みに見送る人々と、これが最後の見納めかと心の中で思い続けた。

品川駅到着、深夜の月が煌々と輝いている。真夜中、列車に乗車、品川駅の一番禺、海寄りのホーム、現在でも品川を通過する際、昔の事を思い出す。やがて我々を乗せた列車は出発、一路広島へ、眠れぬ一夜を列車の中で過ごす。いつか眠りに入り、列車は予定通り広島駅に到着。愛国婦人会の出迎え、宇品まで続く。宇品で乗船。船は約一万トン級の病院船、アルゼンチン丸である。大勢の見送りの中、船は出港。船室は甲板より三層くらいの位置の畳敷きの船室である。船はいつか下関に到着、夜を待って出港、進路を大連に向けて。我々も疲れの故か、いつか深い眠りに入る。

やがて夜明けと同時に一齊に甲板に出る。そこには昨日出航した下関が眼前にあるではないか。昨日、何か船に嫌な予感がした。話によると、昨夜半アメリカの潜水艦の襲撃があり、急速進路を変更し下関へ引き返したそうである。昭和十七年、玄界灘でアメリカ海軍の攻撃を受け、何もなかっただけでも、もっけの幸いであつた。再び下関を出港、今度は対空対潜のための見張員が付き、船は物々しい警戒であつた。船は静かであつたが、船酔い者も随分と出た。

今回は途中異常なく大連港に安着。埠頭より大連駅まで行軍。何か大陸的で、大豆糟の山々、塵埃の多い街、馬糞臭い汚い所であつた。大連駅で乗車、一路列車は北進する。満州は鉄道は広軌であり列車も大きく、振動も少なく気分がよかった。一望千里の広野を列車はやがて哈爾濱市郊外香坊駅に着く。ちょうど五月五日雪が降っており、実に寒い源頭である。大変な所へ来たものだと思つた。出迎えの将校、下士官、兵に引率されて香坊の軍用ホームから孫家の兵舎まで約四キロ、トラック輸送であつた。

着いた所が東滿綏省哈爾濱第九七部隊で、第二大隊第五中隊に編入された。無限の広野の一角の兵舎、遥か彼方に香坊の飛行場があり、訓練のため、一式あるいは三式の戦闘機の離着陸の繰り返しが見え、ある一定期間いては、南方地区へ展開を繰り返していた。その飛行場の周囲に、地下に航空燃料倉庫が極秘裡のうちにあるため、夜間怪火信号が上がり、その度に夜間非常呼集がかかり、現地まで夜間駆け足である。ちょっと気分が戦地と感じつつ、連日私たちも訓練が続き、満州でいま一度、一期の検閲を受けた。

その間に哈爾濱大演習が行われ、参加部隊は哈爾濱の一七七部隊及び九七部隊、山砲の三七九部隊、阿城県の三島の重砲部隊、新京の六七五部隊であった。私も初年兵教育を受けている最中であつたが、選ばれて参加。十五榴の実弾、山砲の実弾が頭の上を通過して前方一里あるいは山砲のごときは前方百メートルくらいの所に炸裂する。私の前数メートルに山砲が炸裂、火の粉を全身に浴び、生きた心地がなかった。実戦さながらの演習で、私が匍匐前進していると、私の隣で石

黒師団長が自ら匍匐前進をしている。すべて実弾演習であつた。

また、一期の検閲時、気温百度（華氏）以上、行軍演習、夜間前哨勤務であつたが、昼間の十里以上の行軍で、暑さのため落伍者続出。ある中隊では初年兵全員落伍、当日、前哨勤務終了後まで落伍者の収集せず、三名の初年兵が死に、部隊葬が行われ、一躍上等兵に進級であつた。爾後、二等兵進級選拔上等兵候補者に、十二月一日付で上等兵に進級、翌年初年兵係を担当する。

私の所属は従前どおり軽機関銃で、内地では九六式軽機関銃であつたが、当満州地区では十一年式軽機関銃で、土地柄不向きな兵器であつた。まず、脚がソリ式でなく地面に食い込む式で、すぐに脚ぶらを起す。弾倉が十五発詰めで、五発ずつ薬莖を上から入れるので、春季の風塵期には埃が入り、すぐに薬莖膠着を起こし故障の原因になってしまうのである。満州の春は一時期、風塵期というものがあり、一寸の先も黄塵で見えず、歩哨は眼鏡をつけ、随分と骨を折った。特に

兵器の手入れには、まず水で洗ってからの手入れであり、スピンドル油で磨き込まねば錆がくるし、初年兵泣かせであった。

初年兵係終了後、父が亡くなったため、二十一日間の請願休暇が下り、哈爾浜より東京まで、父の葬儀に立ち会った。請願休暇が終わりに帰隊すると、今まで教育した初年兵全員、東滿総省鶏寧の第十六野戦兵器廠、第二六三三部隊警備隊要員として転属する。部隊長は篠原大佐で、河東、綏陽、綏西の支所及び出張所に分遣した。私は綏西出張所に、隊長は有村少尉で九州出身の人であった。綏西出張所は業務隊と警備隊に分かれ、私はその警備隊所属である。警備隊の隊長は、九七出身の野地准尉殿、その後榮転で浅野曹長が隊長に代わった。綏西出張所は牡丹江省細鱗河のほとりにある丘陵に相当数の爆薬庫があり、その警備で三日間の連続衛兵である。

私も衛兵司令あるいは分哨長を務め、衛兵を下番すると弾薬庫、主に十五センチ榴弾及びその薬筒の整備、計量等の勤務につく。なお、中に甲臼榴と称するロケット

弾があり、砲を必要としない、ただ櫓を組んで発射させる由で、前頭部、中央部、後部の三体からなり、それぞれ連結して統合し発射するのであり、業務隊の専門兵もわからず、皆、新兵器を見守るばかりである。

その間、ソ連と国境を接していたため、時折、ソ連機が越境して来る。でも、関東軍の命令で発砲は禁ぜられていた。ある時は三百メートルくらいの低空で、飛行士の姿もよく見えるが、どうすることもできなかった。

私が請願休暇中、部隊では南方転進のために、その編成作業中であった由。なお軍隊では、長男や相続人は極力前線に出さぬようなとの配慮がなされ、私もその恩恵にあずかり転属したのであった。昭和十八年秋、満州第九七部隊は沖繩に移動。その最中、アメリカの潜水艦の魚雷攻撃を受け、轟沈させられ、軍旗も同年兵も全員戦死であった由、風の便りに伝わってきた。その節の師団長は楡洲中將であったと聞いた。

綏西地区でも昭和十八年当時、国境綏芬河方面より連日のごとく輸送列車が南下してゆく。重砲が、戦車

が、続々と。分哨勤務の傍ら折々垣間見た状況である。我々の兵舎も半分地下に埋もれ、兵舎全体擬装され、各弾薬庫も全部擬装されていて表からはよく分からない。

昭和十九年春、第十六野戦兵器もト号演習との名目で国境を撤退、東滿總省牡丹江の愛河の戦車隊に集結、牡丹江の愛河よりそれぞれの爆薬集積の所に転進。私は鮮満国境の大橋という弾薬集積及びその警備に当たる前哨勤務である。私はその節、朝鮮より入隊して来た初年兵教育に再度当たる。そのとき、初年兵係の教官には野沢准尉が当たった。

そのときの装具は、初年兵各人小銃一挺、帯剣は全員に渡らず、被甲にいたっては一つもなかった。全員幕舎生活で、よく雨が降り、水質が悪くて下痢する者が多く、浄水器も間に合わなかった。連日野積みの弾薬の整理に大童であったが、そのうち、いずこともなく日本は大東亜戦争を停戦したという噂が流れ、新聞等にては沖繩戦の戦況不利を伝えていた。折も折、ソ連軍が綏芬河より越境、続々南下中。関東軍の命令で

戦闘を行わず、ただ撤退せよ。発砲も禁ぜられた。私たちの大橋にもソ連兵が戦車で乗りつけるとか、随分デマが飛んだ。

八月十七、八日ごろかと思ったが、ソ連の将兵が乗り込んで来て兵器の調査をした。それ以前、私たちは砲弾の信管の安全栓をほとんど抜き、少しでも触れると大爆発するようにした記憶がある。並べられている兵器を見て、私たちはいやな気持ちになった。これでは武装解除ではないかと思った。玉音放送も日本の降伏も全然知らなかった。依然として山中に立てこもって最後まで戦った連中もいた。

私の部隊で池上伍長は、東大出身の下士官ですが、生きて虜囚の辱しめを受けずと、山の中で敷布二枚を敷き軍人勅諭を前に置き、小銃の引鉄を足の親指で引き己の顔を撃ち抜いて亡くなった。私は教育中の朝鮮の初年兵（ほとんど北朝鮮の人が多かった）に持てるだけの糧秣を分け与え、速やかに故郷に帰るよう指示し、皆と別離した。日本兵の中にも逃亡者が続出、わずかの携行糧秣及び手榴弾一個を持ってである。八月十五

日終戦で、その夜、既に日本の小銃を持って動哨し、満人のそれぞれの民家には赤旗が立ち並ぶ。その早さにただ驚くばかりであった。

その節、逃亡した同僚は、私が復員した折には、舞鶴の復員者名簿にまだ生死不明であった。私は周囲の状況から、単独行動よりも部隊と行動を共にした方が身の安全上よいと判断、部隊と行動を共にすることとした。そして部隊と共に大橋の飛行場に集結、しばらく夜営して、千名単位の大隊を編制。私の大隊は斉藤和男飛行中尉の指揮で、次の集結地牡丹江目指し出發した。これを機に部隊は散り散りになった。

私はその折、背囊に天幕、その中に軍隊の靴下に米を詰める。一つに米が一升入る。それを五、六本背囊に詰めて、雨の日も風の日もただ行軍。日中は連絡下士官を務め、また、命令受領やその連絡等に人一倍歩き努力した。野営に天幕をかぶり、毎日毎回の飯盒炊さんに米を儉約しつつ研ぐ。夕食は日暮れ後であるが、ある日早明、米を研ぐため池の傍らに行ったとき、日本兵の死体の腐乱した姿がそこに浮いている。そ

の臭いをする水でまた米を炊くのである。この世の地獄である。街道にはソ連の重戦車に轢かれ煎餅のようになっている様、それを傍らに見つつの行軍。

中でも一番気の毒に思ったのは滿蒙開拓団の人々であった。また、従軍看護婦の女性たちで、行く当てがあるでなし、私の腰に掴まり「兵隊さん、一緒に連れていってくれ」との懇願である。私たちもこれからどうなるか分からぬ身、その手を振り切って別れたが、その後その人たちはどうなったであろうか、今でも不憫でならない。途中、青酸カリで死に急ぐ人、栄養失調で子供を亡くした人を行軍中随所に見た。

何カ月も歯を磨いたこともなく、入浴など全然皆無すれ違う人は皆、汗と埃で乞食同然の姿である。また行軍中、野営地でソ連兵によって時計や万年筆を盗まれるのが頻々と行われ、ある日、それを目撃したソ連軍の将校が、有無を言わせず兵をピストルで射殺し、日本兵に穴を掘らせ役げ込んで埋めて、「これでよい」と行ってしまった。

日本に越境して来たソ連兵は、独ソ戦の捕獲であっ

た者及び囚人がほとんどで治安が相当に悪く、盗難、強姦など至る所で行われ、手の施しようもなかったらしい。

行軍途中、落伍する者はそのままにして我々は進む。何分にも混成集団であるため、正確な人員掌握は困難であった。どのくらい全行程で歩いたか、はっきりした記憶がないが、七十里以上は歩いていると思う。やがて目的地の牡丹江に着いたが、皮肉にも私がト号演習で集結した牡丹江省愛河の兵舎、東滿總省の随一のモダン兵舎が一大激戦地となり、以前の様子とは全然異なり、兵舎はほとんど廃墟になり、爆撃の跡、兵舎内外、営庭の壕の中に、無数の日本兵の死体が山をなし、夏服の下は皆白骨化して横たわっている。足の踏み場もないくらいである。

後日聞いた話だが、日本の用兵は主体が歩兵の散兵戦で、以下はそれに付随するものであった。ソ連の用兵は立体戦で、まず空襲、次に重砲の砲撃、その次が重戦車の攻撃、その間付近に歩兵が接近している。日本軍はこの用兵の相違で負けたようである。

牡丹江に着いてからだんだんと秋も深まり、やがて冬外套を着たまま防寒帽をかぶり寝ていると、あまりの静けさ。辺りを見回すと一面の雪、私の外套の上にも帽子の上にも雪が積もっていた。やがて集結地で編成が出来上がり、ソ連の将校も兵も我々に向かって「東京ダモイ」の連発である。

昭和二十年十一月三日雪の降る日、貨物列車に乗車。中は上下二段に仕切られ約五十人くらいずつ乗車、東京に帰れると百パーセント信じていた。貨車は牡丹江より細鱗河畔へと進む。我々の兵舎を再度見ながら綏芬河を経てソ連領内に入った。車内では皆が、あと何時間でウラジオストクだと窓外を眺めている。貨車は一向に止まる気配がなく、ただ轟進するのみ。

窓外は一面湿地帯で、家数も少なく荒涼としていた。とある駅で貨車への給水のために一時停車をした。そのとき、手振り身振りよろしくソ連人に北の方向（列車の進む方向）を指し、この方はどこへ行くのかと聞いた。くだんのソ連人は一言「モスクワ」と答えた。貨車に戻るとその話でもちきり、全員一瞬の驚き

で言葉もなく、皆、毛布をかぶり水が引くごとく沈黙状態であった。だれも話をする者なく、毛布の中で、この後どうなるのかと疑心暗鬼に、ただ恐怖に戦くばかりであった。わずかばかりの給食も喉を通らない。

私の同年兵の白鳥上等兵が、毛布の中で、携行した肥後守（小刀）でまさに喉を突くべく構えているのを目撃、私も必死で止めた。彼の目には涙がいっぱい、生きてゆく自信がないと私と抱き合いながら共に泣いた。貨車の全員も皆同じであろう。貨車はおかまいなく一路目的地まで走り続ける。私は立場上、貨車内の全員に、我々全体が一つになって行動すれば、まさか殺すこともあるまい、行く所まで一緒に行こうではないかとその場で誓った。

なるほど夜間よく見ると、列車は北極星の方向に進んでいる。ウラジオストックならば南の方に進むべきである。貨車に乗車以来十数日、とある駅に着いた。さあこれから入浴だと、貨車から降りて夜道を列をつくって歩く。とあるソ連人の民家の中から電灯の光が洩れ、その中で音楽を聞きながら皆で踊っている姿が

見える。これから我々はどこへ行くのか、まして今は戦時捕獲の身、この時ほど天国と地獄の無情を味わったことはなかった。

そこはイルクーツクであったらしい。やがて貨車は一日中バイカル湖畔を走る、一面の銀世界である。停車時、湖のほとりまで行き汀に寄する水音を静かに聞いた。これが世界的に有名なバイカル湖かと、今も郷愁として残っている。

貨車はやがてタイセツト駅に着く。乗車以来十五日目、ここが目的の場所であった。

貨物列車から降りる。一面の雪、雪で十一月半ば、私たちは普通編上靴で目的地まで徒歩。前後左右をソ連兵が警備する中を、凍った地面に足を滑らせ、転びそうになりながら九十二キロにある収容所に辿り着いた。夕方薄暗い中、霧の立ちこめる暗い雰囲気。収容所に、我々千人の兵隊が入った。以前に入っていた者と合わせ約二千人の大世帯である。この地点は、東経百度、北緯五六、七度の位置であり、日本の樺太の北の先端辺りであると思った。皆それぞれの丸太ででき

た兵舎に入る。

電気設備もなく、換気の悪い兵舎で、二階への階段がついた板敷きの寝台である。着いたその時からローソク代わりに白樺の皮を燃やす。また、これがよく燃えるが、煤が多く出て、日も鼻も煤だらけ。皆黒人のようになり、人のことはよく分かるが、自分もそのとおりであるのに気がつかなかった。そのうち、機材庫の方からわずかずつケラキンが配給になり、灯火の方も落ち着いた。毎日わずかばかりの食事、それも零下六〇度地帯では輸送する方も大変らしく、黒パンなど夜中の十時、十一時ごろ到着する。それを空腹を抱え、我々は待っている。

真夜中、白樺の皮を燃やしつつ、届いた黒パンの配給。勿論、日本側の炊事係班長の立会いで、寒い雪も凍る中で行われる。時には暗闇を利用して待ち伏せて、貴重な黒パンを盗むのである。闇の中で怒声が飛び、格闘が演ぜられる。人間、生活困窮の極限に達すると見栄も外聞もなくなるものである。元大学の先生、講師が、医者がわずかな黒パンを盗むのである。このよ

うなことは自ら困窮状態を体験してみなければわからないものである。

昭和二十年入ソ当時の糧秣の支給量は、将校と下士官、兵とは当初食糧の内容が少し異なっていた。将校は本来、国際法で自活作業以外の労働を課することを禁ぜられているのだから、将校に対しては量より質を重んじた給与が行われた。であるが、炊事設備の関係上、実際には将校、下士官、兵の間は区別なく行われ、昭和二十二年以降は全く区別はされなかった。ソ連当局が捕虜の逃亡を恐れ、炊事場に食糧の保管を一切認めなかったので、一日分ごとに支給されるものを、そのつど使い切ってしまうねばならない。そのため料理は単調にならざるを得なかった。

その献立は

朝	黒パン、スープ
昼	黒パン、雑穀がゆ
夜	黒パン、スープ

要するに、黒パンと雑穀がゆとスープの三つが食事の基本で、どんな激しい徹夜作業でもこの規定の食事

以外に夜食など支給されることは決してなかった。

(グラム) 昭和二十一年 昭和二十年 昭和二十二年
春 冬 年以降

黒パン	三五〇	三〇〇	作業量による	三五〇
雑穀	四〇〇	二〇〇	"	四五〇
野菜	四五〇	六〇〇	"	八〇〇
魚	一〇〇〜二五〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
肉	五〇	五〇	五〇	五〇
油	一五	一〇	一〇	一〇
塩	二〇	一五	一五	二〇
砂糖	一八	一五	一五	一八
茶	三	三	三	五
みそ	三〇	三〇	三〇	三〇

右の定量は少なくとも昭和二十二年以前は有名無実であった。

右が食糧配給の実情であるが、厳寒冷地においては寒さに耐えるには不足であると、当時の元軍医の言である。なお、厳寒地であるために野菜の供給が不足し、そのために壊血病が発生し、歯茎から出血、鼻血、切

り傷からの出血が止まらない、鳥目などで医務室は大混乱であった。私なども入ソ時は体重が十六貫ばかりあったのが、たちまち八貫くらいになり、座っていると尾てい骨が痛く座ってはいられなかった。以上のごとく、わずかな食糧分配のため、その苦勞が絶えず、天秤棒の計りを作り、しかも数人が見張りでの分配であった。

ちょうど入ソ当時、ソ連自体も大飢饉で、ソ連人自体も食糧状態が悪く困窮していたようである。ましてや我々日本人捕虜はなおさらである。入ソ当時、栄養失調で亡くなる人が後を断たず、作業中の休憩で隣に座っている者が、作業開始でも立たない、どうした、と見ると死んでいる。兵舎に帰って来て椅子に座ったまま死んでいる。

夜寝てそのまま起床時に起きてこぬ、なぜだろうと見ると既に死んでいる。

私は考えるに、現地召集で急いで入隊した人、補充兵で軍隊経験の浅い人が多かったようだ。今でもよく私が話すことであるが、昼食の現場でもらった物に、

飯盒に半分くらいの水と小豆の粒が四粒入っていた。これで一日中ツルハシやシャベルで土工作業である。道を歩くにもただ食べることのみ考え、日本へ帰ることも忘れた。

我々の来た目的はバム鉄道、即ち第二シベリア鉄道の建設であり、第一期建設としてそれら作業員の兵舎造り、第二に、それらの資材を運搬するための道路造りであった。鉄道工事で最も基本的なことは路盤づくり。

この地方では十一月から四月まで地下一・五メートル乃至二メートルまで凍りつき、スコップなどはまったく受けつけないし、大きなツルハシを振るってもピンとはね返って、その当たった部分がちよっぴりへこむだけである。よほど腕力の強い者がやっても、わずかに氷片が飛び散る程度で、コンクリートの壁を崩す方が凍土を掘り起こすより楽だといわれる。勿論ダイナマイトも使用されたが、ダイナマイトで土を爆破するにも、火薬を装填するための穴は手で掘らねばならない。穴を掘るには、まず焚き火をして氷を溶かし、

すばやく焚き火を他に移し、そこを掘り始めるというようなやり方が用いられた。

路盤をつくるための土運びも、最もつらい労働だ。

ターチカと呼ばれる一輪手押し車に土を積む、そして運ぶ仕事である。このバム鉄道はシベリア鉄道より更に北の、人跡まれな、一平方キロ当たり人口が一人にも満たない無人地帯の鉄道工事であって、この建設に従事する者の作業環境、生活環境は著しく悪く、バム鉄道工事で何人の日本人が死んだか明瞭ではないが、それは「枕木一本につき一人の割で死者を出した」と表現されている。

なお、シベリアのような極限状態に追い込まれたときは、何らかの技能を持つ者や、小回りのきく器用な人間が得をするということである。特に大工、洋服仕立、製鉄、測量などで、収容所における貴族階級で「労働も大したことはなかった」「食事もよかった」ということを書いている人もある。

シベリアには春、秋という季節はほとんどなく夏から一足飛びに冬になり、寒さが終わったと思うともう

夏といわれるが、通常九月には早くも雪が降り始め、翌年五月まで雪と氷に閉ざされ、私の知る限りでは六月二十八日になって雪が降った。特にマローズと呼ばれる寒波がやってくると大気中の水蒸気が凍り、微細なガラス繊維の屑のようにチラチラ空中を浮遊し「淡い霧」のように視野いっぱいに立ちこめ、音さえ凍るようで、石を叩いても木を打っても発する音は金属音である。

収容所内はペチカで薪を焚いているので温度は高い、換気もよくない、着替えもなく、一週間に一度のシャワー。しかも集団で雑魚寝していれば、虱にとっては最高の繁殖条件である。虱は、シャツや下着の縫い目にズラリと卵を産む。卵は勿論、虫自体も指で潰したくらいでは死なない。虱の大発生。ソ連人の家にも勿論多くいるが、収容所ほどひどくはない。虱の跡の傷が膿んで入院した者もあり、ソ連側もこの虱にはかなり気を遣い、軍医が下着検査したり、零下五〇度に毛布など晒したが、虱は低温には効き目がなかった。

そのうちに熱気消毒室（ジスカメラ）に持ち込み衣

類を消毒し相当の効果を上げ、日本人捕虜の入浴時の散髪及び陰毛、腋毛の除去が行われた。

虱だけでなく南京虫の繁殖も甚だしく、寝台の柱の板をめくると、南京虫がいるわ、いるわ、日本の銀座の人通りよりも、その倍あるいは三倍くらい、板の木目が見えぬくらいである。

この南京虫は、暗くなるとその棲息所からのこのこと出てきて人間の血を吸うのである。夜、耳をそばだとすると、俄か雨が近づいてくるようなザザーという音を立て、移動する。かゆい点では虱よりはるかに強烈で、一晚中顔などをかまれるし、ボクシングでダウンした選手など及びもつかぬほど腫れ上がってしまう。

南京虫を防ぐためにいろいろな方法が考えられた。足と手に靴下の重ねばき、首にタオルを巻き、頭に帽子をかぶり、その上を布切れで巻き、要するにすべて露出部をなくしてしまう。虱と南京虫はいつもつきまとい、体力を落とす原因となった。そのうちに一人の考案で、蒸気を木の割れ目に吹きつける物を作った。これで私の収容所は相当の効果があつた。

加えて、便所のことである。便所は兵舎から離れた

所に設けられる。ソ連では便所は母屋より遠く離して造るのが普通である。便所には簡単な小屋掛けはしてあるが、大便所には一つ一つの間仕切りもないし、金隠しもない。したがってお尻をずらりと並べ、煙草でも貸し借りして雑談しながら用を足していた。糞壺は溝を深く掘り、それに板を渡しただけである。厳寒中その始末が大変。糞が凍ってピラミッドのごとき山。小便が凍る。いちいち兵隊がツルハシで碎き、小便をモッコに積んで捨てに行く。ただ救われたことは、表は寒いため、体に跳ねた糞の粉末や小便の粉末が匂わぬことであつた。便所で困るのは拭く紙のないこと。

一日五グラムの煙草が支給されていたが、紙がない。ソ連人は排便後そのままか、所によつては手で拭いていた。新聞紙も時折、その切れ端を拾ってきて我々も尻を拭いたり、煙草の巻紙にした。煙草の好きな者は一日五グラムでは足らず、松やコケを刻んで吸っていた。私たちは不潔に対して鈍感になって、毎日労働して汚れている体にもかかわらず、一週一回の風呂さえ

厭うような心持ちになっていたのである。

昭和二十一年九月、終戦以来丸一年後に、我々捕虜に初めて各自の家庭に通信することが許された。特別な往復葉書が支給され、一枚は家庭あての便りを書き、もう一枚に自分の名前を書き込んだ。捕虜用の郵便葉書に「俘虜」と日本字で大きく印刷してあるので、日本兵即ち我々の誇りを傷つけ、出さぬ者も随分いた。我々は頻繁に移動させられた。作業大隊全体として動く場合もあるし、その一部が、あるいは一名が突然転属させられることもある。私たちも九十二キロより作業大隊全員、一四六キロ地点に移動、トラック輸送であつた。

このような移動は、鉄道や道路建設の工事の進展に伴い、収容所を逐次前進させる必要上からもあるだろうが、一面、捕虜同士の交友関係が深まり団結強化を予防する配慮もあつたことだろう。この移動の度あるいは日中の作業中に頻繁に所持品の検査が行われる。

「凶器の有無を調べるため」と称して、今まで幾度かソ連兵の強奪からかうじて隠してきたものが片端か

ら取り上げられ、時計、万年筆、安全カミソリ、缶切り、ナイフ、はさみ、針、糸巻類、タバコ、手製のパイなど、着替えのシャツ一式以外は何物も残されない。所持品検査の際は、防寒帽や綿入れは引き裂いて中をのぞく。たちの悪い兵隊にぶつかると股間まで手を入れ、口の中から肛門まで調べる。文句を言う者は長靴で足蹴にされた。検査が済むと衣服は手当たり次第放り出されるので、どれがだれのかさっぱり見当がつかなくなる。

ガタガタふるえながら自分のものを探すのであるが、受けた屈辱と憤激で胸が張り裂ける思いにかられた。煙草を吸うためにはマッチが必要で、最初は持参したものがあつたが、マッチがなくなつてからは、収容所の中にはまったくそのような物はない。そこで拾った鋼や鍛工場などで折れた鋼鉄の切れっぱしを拾い、石英質の青白い硬い石塊を拾つてきて火打ち石をつくつた。そして布切れをほぐした糸を束ねて、その一端を焼き焦がすと、それが火口になる、火口にかすかな火が付くとあとは、ふうふう吹きながら乾草などに移し

てゆくわけだ。火打ち石のないときは綿から発火させる方法もある。綿服の中から少し綿をつまみ出し、その綿を板の間にはさんで根気よく摩擦すると、十五、六分もすると白い煙とともに綿が燃え始めるのである。厳寒期にはこの方法で火を起こし、だんだんに焚き火にして、暖をとったり携行の昼食を暖めるのに利用したのである。

一応収容所生活がそれなりに軌道に乗ってくると、木工場などに作業に行っていた者が、ひそかに将棋盤や碁盤をつくつて持ち帰り、やがてはマージャンのパイまで製造するようになった。パイには絵や文字を彫つて墨を入れ「本物そっくり」であつた。そして夕食から点呼までの時間に、暗い室内で勝負を楽しむ者も現れた。この他、退屈しのぎに、のど自慢の兵隊の所には歌や講釈などを聞く者が集まり、やがて演芸会へと発展してゆき、芝居、漫才、歌謡曲、それにベニヤ板と電線からつくつた手製の楽器による軽音楽など、出し物も豊富で、芝居には女形も登場した。ソ連側もこの種の催しは労働能率を上げるのに必要と認めたのか、

積極的姿勢を示し、芸達者により編成された演芸班が各作業隊を巡回慰問するまでになった。演芸班は労働を軽減又は免除されたから、自信のある者は喜んでこれに参加した。

昭和二十三年ころから一部の収容所に日本内地からの手紙が着くようになり、収容所内は入ソ時よりの暗さが半減し、楽しいこともポツポツ起こってきた。

ソ連地内は思想及び経済のやかましいところ。昭和二十三年ころソ連の査察官がやってきた際、捕虜に対し「横流しはないか」との質問に接し、一人の日本兵が収容所長に「横流しがあること」を答えた。旬日を経ずして収容所長は司令部に呼び出され、責任をとらされて他の収容所に移って行った。後、我々はその仕返しを恐れたが、それについての反応はなかった。以後急に食事がよくなった事実は、普段は規定以下の食事しか与えていなかったことを裏付けるものである。

昭和二十二年、抑留三年目ころから民主運動は次第に高まり、日本新聞の発行及び同新聞の輪読会が行われ、民主グループにより任命された新聞解説員の主導

のもとに講習会が催されたりした。各収容所の講習会よりさらに程度の高いものとして、地区政治学校が利用され、これらの学校に入るのには民主グループの推薦が必要であり、講師にはソ連の政治部将校が当たり、その期間は二、三カ月で、卒業すると生半可な革命用語を駆使して筋金入りとなって帰って来て、収容所内のアクチブとして活躍し、青年行動隊の主要メンバーとなった。共産主義教育においては、ただ学習だけに終わらせず、実践がきわめて重視された。

オルグを動員しての反社会主義者の吊るし上げである。通常、批判会とカンパが行われるのであるが、批判会に引き出される者は、「反動」の烙印を押されることがすでに決まっているのである。批判会の最後の仕上げは、いよいよ吊るし上げである。壇上あるいは前に立たせ、周囲を収容所の全員で囲み、アクチブの司会で議事が進行し、オルグが前に出て「被告」の罪状暴露をするのである。要所要所に配置されたアクチブが「同感」「同感」「民主主義の敵だ」「やっちまえ」などと叫び、あるいは拍手を送るのである。これらの

行動により、元憲兵、特務機関員、巡査、後には将校も追放され、将校収容所に、あるいはハバロフスクの戦犯収容所に送られて行ったのである。

時には各作業所にゲーペーウの人々がもぐり込み、絶えず我々の言動、動勢を探る。たくみな日本語で、そのような事を言いますとソ連邦憲法で処罰しますと私も言われたこともあるし、直接ソ連将校に拳銃を突き付けられて、二回も収容所内の動勢及び憲兵、特務機関員の有無を調べられた。確かに収容所内に憲兵、特務機関員はいましたが、我々は日本人です。彼らを守りました。その人たちも必死で黙り通しました。

毎月一回あるいは三、六カ月に一回、ソ連軍医によって定期検診が行われ、このときの診断により捕虜たちは体位が決められる。体位は六級に分けられ、一級は昼夜の労働に耐え得る者、二級は夜間労働を除きほぼ一級に準ずる者、三級は軽作業に従事する者、四級は老年、不具、病後、衰弱などの肉体的欠陥のため作業を免除される者、五級は重症者で特に栄養失調及び胸部疾患者、六級は外傷患者である。五級、六級はたい

てい入院で、普通は一級から四級までである。この際の健康診断の方法は、全員が全裸になって順番を待つ。軍医は全身を見回した後、胸のあたりを軽くつまみ、それから後ろ向きにして、あるいは四つんばいにしてお尻をつまみ、「一級」「二級」と判定を下す。

私の収容所へはよく女軍医が多く来た。聴診器は一切用いない。皮膚の色つや、皮膚の弾力だけの判断である。収容所内には医務室があるが、捕虜は第一次的には、診断を受け病氣と認められた場合は休養し、あるいは医務室内で療養する。収容所の医務室、病院もヨーチンなど数種類の医薬品しかなく、メスの代わりに安全カミソリで手術された人もいたくらいである。因みに収容所の日本人軍医は産婦人科医であった。

収容所では、捕虜が死亡すると死体収容所に安置され、三日たつと医師が解剖する。この解剖は死因の究明ではないらしく、だれに対しても行われた。短時間で終了し簡単に縫い合わせておく。これは別の話であるが、収容所で死んだ人間が門を出るとき警備兵が銃剣で胸を突き刺し、足の踵を切断することになってい

た所もあるようであつた。

ソ連では死体を美しく粧うという習慣はないようで、死亡すると、着ているものは全部脱がされる。真冬でも素っ裸で、仲間の捕虜がそこから集めた木材で作った粗末な棺桶に入れる。死体に衣類を着せてやろうという戦友の要求は、「衣類も寝具もすべてソ連邦のものだから死体と一緒に捨てることは許されない、死体と寒さとの関係があるのか」と拒否された。

この死者の着ていた衣類は、熱気消毒して後に再び生存者にあてがわれるのである。供養のダンゴや野花も棺桶に供えることは許されなかった。一般的にこの種の宗教的というか精神的、情緒的なことについては、『唯物論主義者』のソ連当局の理解を得ることはできなかった。捕虜になってから最初の二年間くらいが最もひどく、死亡者も連日後を断たなかったが、シベリアで共産教育を受け、帰国後ソ連礼讃を続ける人でさえも、「人ソした当時の状態はいま思い出してソツとするほどの、言葉では形容もできない生活であつた」と話している。

来る日も来る日も、今月も来月も、終日「ヴィストラ、ダワイ」（早くやれ）と銃床でおどかさながら、我々捕虜たちは空腹で、また目のくらむ体で夢遊病者のように重労働に従事し、故郷や肉親、いや私が今まで生きてきた人間社会と全く隔離され、衣食住は考え得る最低の水準に強制され、娯楽もなければ慰安もなく、ただ動物的にその日その日をあえいでいた。

「生きているのをどれほど情けなく感じたことか」

「死んだ方がましだと何度思ったことか」

「実際、我々は先に死んだ人がうらやましかった」多くの抑留者は当時のことをこのように回想している。郷愁などという甘い感傷ではない。郷愁などというものは、心身にゆとりのあるとき感ずるもので、捕虜たちにとっては故郷はむしろ、「どこか遠く、よその国のような気がする」し、「かつての自分もそのようなことがあったのかと他人のように思える」ことにすぎない。捕虜たちを襲ったのは甘い感傷ではなく、このままシベリアで朽ち果てるのではないかという底知れぬ恐怖であつた。

昭和二十三年ころ、收容所外に自家発電装置ができて、タービンが回る。收容所内にタービンの回転に合わせ明かりが明滅する。何か兵舎内に春が来た思いであった。既にバム鉄道の敷設も三百キロの終点まで進み、列車も曲がりなりにも走っている。有情無情万感のかたまりの結集である。鉄道の道床に、鉄路に、それに沿うように走る道路に、私たちは涙なくしては見られない。早いもので入ソ以来四年、既に大部分の同僚は日本に帰り、残っている我々も極くわずか、收容所の中に三百人とはいえない。一時は二大隊二千名からいたものが、私も最後の残務整理要員で昭和二十三年を越冬する。

煙突の煙が高く上がらず屋根ごしにすぐ下り、兵舎をそのまま下りて地面にはってゆく。北の空にはオーロラが大空に向けて揺らいでいる。明日からまた寒くなるぞ、零下六〇度を超すかと、一人夜空を仰ぎ感傷にふけていた。

明けて昭和二十四年春、雪も溶けてなくなる五月、帰国再開。待ちに待った私たちにも帰国の命令が出た。

ちょうど辺りの湿地帯からモシカ（ぶと）の大群の襲来。かつて一緒に收容所生活を共にした職業野球巨人軍監督の水原はこのモシカに弱く、顔中腫らし大弱りで困っていた。今は故人となっているが……。

收容所の撤収、総引揚げである。收容所の庭に全員整列、思い出の兵舎はほとんど空き部屋になっている。今まで何回同僚の転属あるいは日本への復員を見てきたか。今日は晴れて全員ダモイ、でも今までの経験から真偽の程は分からない。今までに何度嘘をつかれたことか、苦い煮え湯をのまされているので、中には小躍りして喜んでいる者もいるが、私は本当の所、またかという心が強かった。

全装具をひっ下げて私たちが作った駅のホームへ。我々と一緒に鉄道建設に従事したあの中島大隊と共同作業で作った駅及び線路、その両側に付近のソ連人及び関係将校の見送りである。見送りのソ連の女性など、目にいっぱい涙を溜め、私たちの手を一人々々握って別れを惜しんだ。日本兵の数多くの人たちは「ソ連人は個人的には善良で親しみやすいけれども、一度そ

これらの人が組織の一員となって、あるいは上の命令によって日本人に対するときは、掌を返したような冷酷残忍になる」ということを、必ずのようにつけ加えるのを忘れない。

全員貨車に乗車、列車は静かにホームを離れる。入ソ以来四年半、苦楽を共にした兵舎や道、森、同僚の眠る墓所もある。今我々はそれらを後にして日本へ帰り行く。何か割り切れぬものがある。「きつといつか君らの墓参りに来るからな」と、自分の心に言っただけだ。

貨車は今度は正確に南下してゆく。タイセツトを通過、イルクーツクを通過し、今度はロシア語も大体わかるので、駅の通過が楽しみであった。途中ハバロフスクを通過、一階建ての白い電灯のともる明るい駅であった。ここに戦犯収容所があるのかと、転属して行った将校、憲兵の人たちの面影をしのんだ。ちょうど戦後五十年、昨年、シベリア戦死者及び抑留死亡者の慰霊碑除幕式に友との約束を守り出席した。シベリア・タイセツト病院で死んだ弟の霊魂にも頭を下げた。瀬

島団長以下約三百名の人たちであった。

途中変わりなく、ナホトカに到着。最後の難関ナホトカには、牢名主が新入りをしごき上げるように、帰還者の一挙一動に目を付け、摘発する民主グループが待ち構えていた。その連中は百名くらいといわれ、大量の引揚者の受入れ送還、設営などの雑務をソ連当局の指示で担当しているとの噂であった。昭和二十一年、昭和二十二年ころは当時発行の日本新聞を見ても大したことはなかったが、昭和二十三年、二十四年と我々が帰還当時は様子が変わり、民主運動の嵐が吹きすさび、「自由と平和の城砦、ソ同盟万歳」「われわれ労働者の祖国万歳」、さまざまな趣向をこらして作られたブラカードでいっぱい。

彼らのしごきは、一足先に帰る者に対する腹いせかと思われるほど執拗で、時には吊るし上げられ、ナホトカまで来て半年以上も足止め、あるいは突然呼び出され、一人奥地へ逆送される人もいた由である。とにかくよく歌い、踊っている。歌はインターナショナルやアカハタの歌、それに民謡を除くと、ほとんどソ連

の歌を日本語に訳したものであった。

私たちは十日余りして、回船された「英彦丸」に乗船したが、日本の引揚船に乗船してからでも、なお、安心することはできない。何かの理由で再び下船せられた、というようなことも決して皆無ではないのである。さらに、船が出港してからでさえ、私たちは気を許すことはできなかった。出港した後も、六海里地点まではソ連軍の将校が同乗しており、彼らがハシケに乗り換えて帰港する際、連行されたという例もあったと言われている。

埠頭で日本の船を見て動揺しなかった私が、乗船で希望が出て再び迷いが生まれ、今度は船が動き出して再び「帰れるかもしれない」思えば心が乱れてくる。「なんとしても帰りたい」「どうしても帰らなければならぬ」「なんとかこのまま領海を越してくれ」と我々は一心に念じた。

領海を越すまでまだ油断のならないことを恐れているのは、我々だけでなく、民主グループをも含めて乗船者全部が同じであった。危険の度合い、心配の程度

の差こそあれ、ひとしく不安にかたずをのんでいるらしく、あちこちでそのことがささやかれていた。船はもうどれほど離れたのか、それからしばらく経ったころ、船が止まったような気がした。「領海線か?!」だれもがそう思った。高鳴る動悸、緊張の時を刻んでいるそのとき、シンと静まる。ソ連の将校が縄梯子を伝ってハシケに乗り移った。

ドットと上がる歓声。「帰れた!!俺たちも帰れた」我々は抱き合って泣いた。いつまでも抱き合ったまま泣いた。英彦丸は時速八ノット、一步一步祖国日本に近づく。船内は急にニコヤカな雰囲気に変わっていった。

航海は何の変わりもなく着々と日本に近づきつつある。船がソ連領海を離れると、収容所でソ連の威光を背景に権勢を振るっていたリーダーに対する、すさまじい復讐がしばしば行われ、「日本海名簿」(ナホトカ乗船名簿から舞鶴上陸名簿を差し引いたものの意味)というような言葉が伝わっているのを見ると、船中で病死及び自殺と公表されているものの中に、他殺による死亡が絶無とは言えないようである。

昭和二十四年になると、左派の勢力が圧倒的に増大し、船内そして舞鶴でもその主導権は失われず、引揚船や引揚当局に対する待遇改善要求や政治運動が激化し、帰国妨害の傾向を示すようになったのは事実である。

数日間の引揚収容業務の諸手続が終わって引揚げ列車に乗っても、その労働歌を歌い、品川駅に着いてもやまず、出迎えの人々をはねのけ、東京代々木の共産党本部に行くべく、私も隊伍を組んだ一人であったが、学校の恩師の羽交い締め、同窓生のスクラムに遭い隊伍の中から引き出され、親戚、知己及び学校の恩師に付き添われ、東京芝白金の親戚の家に引き込まれた。

品川駅頭では、一応隊伍を組んだものの、それはうわべの気持ちの者が多く、内心はそれぞれが分派的で、それぞれの親戚、知己の手で三々五々分散をし、当時東京代々木の共産党本部へ行った人はほんのわずかであったと思う。それ以後、引揚者からの音信はなかった。

昭和二十五年七月二十日舞鶴上陸、復員業務七月二

十五日、舞鶴出発一路東京へ、同二十六日品川駅到着で、当時舞鶴で千円のお金をもらったのみ、親戚の家に着いた時は無一文である。

往時の赤坂の家は昭和二十年五月二十五日の東京大空襲の際焼失、母が一人残ったのみ。明日からの生活をいかにすべきか、はたと行き詰まった。翌二十六日から就職活動。幸いに母の知人の紹介で、とある東京日本橋の店で働くことが決まり、六月一日より同店に入店した。当時住み込みで四千元。この時ほど手に職があることの有り難さをしみじみと感じたことはない。同じ引揚げの同年兵は約二年くらい親の家に起居をし、就職先が決まらず遊んでいた。

以来、私は約三年ばかり不眠不休の働きづくめ、ゆうに人の三倍は働いたと思う。給料も店でもらう分の三倍以上の収入を上げ、交通費削減のため、近場は歩いて働きに行き、時折は昼食も取らず水を飲んで我慢する。必ず近いうちに家と店を造ると腹に決めての行動であった。

昭和二十七年、初めて住宅金融公庫に申し込みをす

る。その第一回で抽選に当たり、急遽家を新築及び店舗を造ること相なった。年齢も既に三十一歳。昔の学生仲間は既に結婚、子供を早い人は二、三人持っていた。当時、知人の紹介で急に見合いをし、家が完成同時に結婚式、まさしく引越し女房で母と三人で戦力となり、新婚旅行もなし、翌休日から即働き出した。

当時は借金のお山であり、休日もどこへ行くでもなし、付近を流れる荒川河畔で妻と二人で過ごすことが多かった。その年の暮れには暖房の炭を買う金もなく、ただ五十円の炭を買い間に合やす有様。食事に至っては毎日一汁一菜、家族にも無理をしいたものであった。俺は関東軍の現役兵だ、シベリア魂が根底にあると、さすがの借金もわずかで返済し、軌道に乗り始めた。人間、よくなり始めるととんとん拍子。戦死した弟の公務扶助料が母に下り、軍人恩給が私に支給され生活の一助となった。母の死後、戦没者弔慰金として私に支給され、国と東京都が私たちに援助をしてくれている感であった。

戦後既に五十年、子供も一男二女をもうけ、それぞ

れ大学を卒業し社会人として社会のために働いている。振り返って見るに、あれほど我々を酷使し、戦後、要領よく立ち回ったソ連は国が分裂し、同じ民族が血で血を洗う戦争を続けている。これも彼の地で亡くなった同胞の怨念か、それとも天の妥協なき制裁か。このソ連のあがきを見聞しつつ、私の戦後五十年目にこのことを綴る。数多、異国の地で散った同胞の霊安かれと、その冥福を祈りつつ、私はここにペンを擱く。

【執筆者の紹介】

一、大正十年十月三十一日 東京府北豊島郡西巣鴨町大字巣鴨千九百三十一番地にて出生。

父 林萬亀二、母 森田ヨシの長男。

二、昭和三年八月二十八日 宮沢常蔵認知、東京市港区赤坂区役所に届出入籍する。住所も東京市港区赤坂新町三丁目五番地に移る。

三、昭和四年四月一日 東京市港区赤坂尋常小学校に入学。同校卒業後、引き続き東京市立赤坂商業学校に入学。同校を卒業する。

父、常蔵の職業が理容業であるために、赤坂商業学校卒業と同時に入店、理容の道に入る。同店で修業。四、昭和十五年春施行の東京都主催による理容国家試験を受験する。同年七月合格、理容師となる。

五、昭和十六年春まで東京市港区赤坂新町三丁目五番地にて、宮沢常蔵と共に理容業に従事する。当時の家族構成は四人。宮沢常蔵、母宮沢すい、本人と弟の宮沢繁蔵の四人家族であった。

(神奈川県 片山 正二)

シベリア抑留体験記

新潟県 片桐 貞 夫

新潟県南魚沼郡六日町大字六日町一三九番地に大正十四年十二月三日、生まれる。

六日町立尋常高等小学校高等科二年卒業。六日町立青年学校本科(昼間制)五年卒業。

昭和十五年八月、理研六日町鉄工所へ機械工として

入社。同十八年七月、新潟鉄工所へ合併される。

家族は、父母、私が長男で弟三人、妹四人の十人家族であった。

家業は、父が魚沼タクシー六日町営業所を営んでいた。

昭和十九年徴兵志願し合格。同二十年二月、召集。大阪天王寺集合で関東軍一〇二部隊へ直接入隊であった。

満州国阿城に本隊があり、四五ミリ野戦重砲を二門持った野戦重砲隊で、指揮中隊、一中隊、二中隊の三個中隊編成の部隊で、部隊長は秦中佐であった(後に関東軍参謀となった)。

私は指揮中隊に所属していた。

昭和二十年五月、牡丹江より少し南下した鏡泊湖畔に陣地構築のため派遣を命ぜられた。

一、二中隊で重砲一門の陣地構築をするため、指揮中隊から三〇名くらいが現地に参加、観測班、有線班、無線班などの装備であった。

七月には装備が完全に終わり、いつでも戦闘態勢に